

ニューカレドニアにおける社会集団と文化変容
——周縁文化間の「翻訳的適応」——

中村純子

目次

序

- 一、人口統計からみた民族構成
 - 二、社会集団呼称の過去と現在
 - 三、文化変容としてのカレドニア文化
- 結

序

ニューカレドニアは南回帰線上に位置する島嶼である。一七七四年に航海者ジェームズ・クック (James Cook) により航海日誌に記述されて以降、イギリス、フランスを中心に領有をめぐる熾烈な競争が続いたが、一八五三年にフランス領土となった。現在もメラネシアで唯一のフランス海外領土の地位にある。

ニューカレドニア社会は様々な民族や集団の成員から構成されており、人々は「メトロポリタン」「カルドーシユ」「カレドニアン」「カナク」「ポリネシアン」「メラネシアン」など各社会集団を括る。この民族・社会集団の呼称には差別的意味が包含される場合が多く、蔑称から民族アイデンティティを表す呼称に変換された事例はわずか一例にすぎない。

多民族社会で彼らが織り成す文化は人類学的に考察すると文化変容 (acculturation) であり、前川啓治の論ずる「文化接合」あるいは「翻訳的適応」の結果である (前川啓治 二〇〇〇)。しかし現地文化にはニューカレドニアの先住民と宗主国フランスの文化接触のように世界システムで中心―周縁という権力関係 (I・ウォーラー ステイン 一九八一) ではない、周縁―周縁といったいわば水平方向の文化変容が社会生活に不可欠な要素を構成している。

本論では前川の「文化接合」「翻訳的適応」の概念を利用して、周縁文化間の接触による新たな文化が海外領土において住民に共有・維持されうることを論じる。まず、人口統計からニューカレドニアの民族構成について述べ、次に民族集団を含む社会集団 (本論では一括して社会集団とする) の呼称がいかに形成され、変化したかについ

て歴史的に概観し、ニューカレドニアの現代における食文化、言語、生活の事例から周縁文化間の接合について検討する。

一、人口統計からみた民族構成

ニューカレドニアの首都は南部州の比較的南部に位置するヌーメア(Nouméa)である。総人口は一九九六年センサスによると一九六、八三六人で、このうち男性が一〇〇、七六二人で、女性が九六、〇七四人である。首都ヌーメアには七六、二九三人と全体の三八・八%が在住する(ITSEE 2000: 65)。現在では周辺の市であるモンドール(Mont-Dore)、パイタ(Paita)、ダンベア(Dumbéa)を併せて「大ヌーメア(Grand Nouméa)」と呼ぶ。「大ヌーメア」の人口は一一八、八二三人となり、総人口の約六〇%を占めるように、首都周辺に総人口の過半数が集中する。一方、本島北部や山間部あるいは離島においては過疎化が進み深刻な問題となっている。州別の人口についてみると南部州が一三四、五四六人、北部州四一、四一三人、ロワイヨール諸島州二〇、八七七人で、南部州に大半の人々が居住する。

次にニューカレドニア居住者の民族構成をみると、様々な民族がヌーメアを中心に住んでいる。まず総人口に占める割合ではメラネシア系の人々が八六、七八八人で、ヨーロッパ系が六七、一五一人、ワリス・フツナ人⁽¹⁾が一七、七六三人、インドネシア人が五、〇〇三人、タヒチ人が五、一七一人、ヴェトナム人が二、八二二人、ヴァヌアツ人が二、二四四人、上記以外のアジア人八五六人、その他となっている(ITSEE 1997: 16)。つまり民族比においてメラネシア系先住民のカナク(Kanak)が多数派を占め、次いでヨーロッパ系のおもにフランス人

が大集団を形成する。そしてタヒチおよびワリス・フツナ人等のポリネシア系移民が第三位の民族集団となる。ポリネシア系の人々が多数居住する理由はニューカレドニアがこれらの島々と同じフランス海外領土であることに由来する。彼らはフランスの同化教育によりフランス語が公用語であり、同様にフランス語を公用語とするニューカレドニア住民との言語コミュニケーション上問題がない。また、フランス海外領土内の往来となるので、海外渡航のような煩雑な手続きや厳しい制限を受けない。フレンチ・ポリネシアへは定期航空便もあり、南太平洋内の移動は容易である。労働に関しても一九七〇年代前半のニッケル・ブーム⁽²⁾期や現在の観光産業においてポリネシア人の需要は比較的高い。ポリネシア系の移民はメラネシア系の住民やフランス人などとの混血も多く、混血の人々は二つの故郷を持つと感じ、形質的な差異や文化差の障壁を凌駕する。

ヌーメアにおける民族別人口をみると、ヨーロッパ系が三八、〇七四人で全体の半数以上が居住する。一方メラネシア系が一七、一五四人と全体の4分の1以下である。ワリス&フツナ人六、九一人、タヒチ人二、二八八人、インドネシア系二、二七〇人、ヴェトナム人二、二五〇人、ヴァヌアツ人一、二二三人である。とりわけ「大ヌーメア」の民族別人口ではメラネシア系の人々以外、過半数以上を占めることがわかる。ヨーロッパ系が五四、三三三人、メラネシア系二五、六一三人、ワリス&フツナ人一六、五二二人、タヒチ人四、六九三人、インドネシア人四、一三八人、ヴェトナム人二、七〇七人、ヴァヌアツ人二、〇〇六人、上記以外のアジア系七八九人である(ITSEE 1997:17)。これに対してメラネシア人であるカナクは北部州に三二、二四六人、南部州に三四、二七五人、ロワイヨートル諸島州に二〇、二六七人と均等に分散して居住しており、とくに北部は人口密度が一平方キロメートルあたり四人と過疎的状况で居住者の大半がカナクである。

ヌーメア近郊にはスーパー・ストアや各種店舗、オフィスビル、工場、住宅、娯楽施設などが林立しており、

経済的に不自由のない生活を送ることができる。このため人口密度が高く、さらに北部や離島から若者のヌーメアの就学・就職が拍車をかけている。一方、カナクへの土地を含む権利譲渡に関する法律において、北部州およびロワイヨール諸島州をカナクの州と認め、彼らによる自治を尊重している。ヌーメアの人々はしばしば「都会に住むフランス人、田舎や山間部に住むカナク」と述べる。この言説は権力関係でフランス人が住みよい中枢部を占拠し、カナクを辺鄙な場所に追いやったといった皮肉が込められている場合もあるが、民族による住み分けをややステレオタイプに表現している。さらに言及するならば「都市部に住む白人とアジア・ポリネシア系移民、辺境である北部や離島に住むカナク」ということができる。

二、社会集団呼称の過去と現在

ニューカレドニアの人々は自己あるいは他者について「メトロポリタン(Métropolitain)」カルドーシュ(Caldoche)」「カレドニアン(Caledonien)」カナクなどと表現する。メトロポリタンはフランス本国生れ、あるいは親がフランス出身のフランス人をさす。カルドーシュはニューカレドニア生れのフランス人あるいは混血の白人をさす蔑称である。彼らはかつてニューカレドニアへ流刑された囚人あるいは植民地政府関係者、自由移民などの子孫である。またカレドニアンはニューカレドニア人という意味を持ち、人によって定義が異なる。これらの社会集団に対する枠組みは近代において意図的に形成され、時代によって意味が変化する。この章ではニューカレドニア社会を構成するおもな社会集団を呼称から考察し、それらがいかに創造・変容したかを俯瞰する。

二、一 社会集団呼称の語源と意味変化

フランス本国出身者はニューカレドニアのフランス植民地化当時、メトロポリタンの他にゾレイユ(Zoreille, Zoreil)・ゾゾ(Zozo)と呼ばれた。ゾレイユはアンシャン・レジーム期の官吏を皮肉った「王の目と耳 (les yeux et les oreilles du roi)」という呼び名に由来する。そして後にレユニオン人に対する蔑称となった。レユニオンはニューカレドニアと同様、フランス海外領土にあたるアフリカ大陸に近いインド洋上の島で、彼らがフランス本国人の話を興味を以って理解しようと傾注した態度から差別的な呼称が付けられた (Groupe de Recherche en Histoire Océanienne Contemporaine 1997 : 213-214)。この蔑称はさらにニューカレドニアで広まった。ニューカレドニアでゾレイユのイメージはフランス人の大量移住と連関する。一八六〇年代のギラン (Guilain) 政権における自由移民の推奨で、多くのフランス人がヌーメアや地方で綿花、サトウキビ、コーヒーなどの栽培に尽力した。ギラン政権のおもな政策は流刑囚と入植者の受け入れという2原則であった。さらに一九六九年から一九七二年のニッケル・ブームにより鉱山労働力が不足したため、フランスからの移民を大量に誘致した。この背景には一九〇〇年から約四〇年間カナク人口が激減したが、その後増加の方向に転じると共に一九六〇年代末からのカナクの権利回復運動に対して領土政府は懸念し、カナクの政治的発言権を抑圧すべく、フランス本国やポリネシア、ヴァヌアツからの移民を積極的に受け入れる移民政策を敢行した。ゾレイユにはフランス本国から派遣された気位の高い権力者といったニュアンスが感じられる。この蔑称は後にメトロポリタンという温和な言葉に置換された。

カルドーシュは1世代あるいは数世代前に入植したヨーロッパ起源の人、つまりニューカレドニア生れのおもにフランス人などの白人をさす言葉で、ゾレイユと同様に蔑称である。一九六〇年代に出現した造語で、フラン

ス本国の新聞にカナク独立政治運動の記事が掲載された際に登場した。つまりフランス本国で親カナクの立場から作られた言葉である。差別的な意味合いは接尾辞 (oche) で強められ、カナクの自由を抑圧し独立を阻止する植民地主義者、搾取者といった意味を保持する (Ibid., : 13-14, Anne Pitoiset 1999 : 121)。ニューカレドニアでは一九六七年五月九日付けでカレドニア連合 (Union Calédonienne) のジャーナル *L'Avenir Calédonien* にカルドーシュがはじめて出現した。ニューカレドニア生れのフランス人はカルドーシュと自身を呼ばず、他者からこのように呼ばれることを嫌う。そしてカルドーシュはメトロポリタンと対比されるように、フランス人を生誕地や先祖以来の定住地によって決然と分離する言葉となった。その根底には優秀なメトロポリタンに対する劣ったカルドーシュという宗主国対植民地社会の権力構造がうかがわれる。

カレドニアンは定義が多様で曖昧な言葉であるがおもに以下の三つの意味が挙げられる。

- (1) ニューカレドニア全住民
- (2) カナク
- (3) ニューカレドニアのヨーロッパ人

まず (1) については現在のカレドニアン定義の一般的な見解でもある。ニューカレドニアの多様な民族を総称してニューカレドニア人と括弧することで、フランス移民や先住民カナク、さらにポリネシア系移民やヴァヌアツ人、アジア系、アラブ系、その他の移民や混血を包含できる。つまり海外領土としての地域住民を総括することが可能である。全ての民族であるカレドニアン (Calédoniens de toutes ethnies, Jean-Claude Mermoud 1996 :

175)と称されるものである。(2)についてはカナクが後述のように語源において差別語であったため、また「土着民」や「土人」を意味する *indigènes, autochtones* といった蔑称の代わりにカレドニア人が先住民をさす言葉として用いられることがあった。これはメラネシア人と並行して植民地化当初より使用されたが、第一次世界大戦後カレドニア人が(3)の意味で認識されることが多く、さらに一九七〇年代以降カナクが民族アイデンティティを示す言葉に変化したことで、カレドニア人とカナク自身が称することは希少となった。そして(3)は植民地化初期に入植した開拓者のフランス人をカレドニア人と呼んだが、第一次世界大戦後に白人をさす概念として普及した。第一次世界大戦でニューカレドニア生れのフランス人が、「太平洋歩兵隊(Le Bataillon du Pacifique)」としてバルカン半島などヨーロッパ戦線で活躍したが、彼らはニアウリ部隊「*Niaoulis*」と称した。⁽³⁾後に彼らの功績を賞賛しヨーロッパ起源のニューカレドニアの人々をカレドニア人と呼ぶようになった。また、一九五六年結成された政党カレドニア連合にカレドニア人という言葉が使用された。カレドニア連合はキリスト教会およびリベラル派の白人により民主政治の目的で「二つの肌の色、一つの魂の人々 (*deux couleurs, un seul peuple*)」をスローガンに結成されたが、一九六九年にエリート・カナクによるフランスからの独立を主張する啓蒙活動が高揚すると、政党内部でカナク対フランス人に分裂し、次第にカレドニア人は白人を表す言葉になった。カレドニア・フランス人 (*Français Calédonien*) またはヨーロッパ系カレドニア人 (*Euro-Calédonien*) とも称され、蔑称であるカルドーシュの代替語として普及するに至った。

カナクの語源はポリネシア語のハワイ方言で「人間」を意味するタンガタ (*Tangata*) であった。後にタンガタはハワイ語で人間にあたるカナカ (*Kanaka*) に転じ、欧米からの捕鯨船におけるハワイ先住民の乗組員に対して、白人乗組員が差別的にカナカと呼んだ。さらに一八七〇年頃よりカナカは太平洋諸島の先住民全般を表す蔑称と

して普及した（石川栄吉編 一九八七）。ニューカレドニアでも植民者であるフランス人が島の先住民に対して、カナカをフランス語調にしたカナク（Canaque）と差別的に呼んだ。先住民の独立政治運動への参加が活発になった一九七〇年代末以降、Kanakと綴りを変えて先住民自らの民族アイデンティティを示すようになった。現在、ニューカレドニアのメラネシア系先住民は自身をカナク（Kanak）と呼ぶ。もともと蔑称であった言葉を民族の誇りを伴う言葉に昇華させた背景に、タンガタ、カナカといった語源がポリネシア語で人間を意味し、蔑称ではなかった点が挙げられる。換言すれば呼称のルーツにおいて差別語ではなかった。また、カナクは本島北部の創世神話の英雄テア・カナケ（Tea Kanake）におけるカナケの概念にも繋がる。カリスマ的なカナクの政治リーダーであったジャン・マリー・チバウ（Jean-Marie Tjibaou）が一九七五年にカナクの文化復興のため、主催した祭典「メラネシア二〇〇〇」⁽⁴⁾ではテア・カナケ神話が披露され、カナクの地域性や部族を超えて広く支持された。チバウはカナクについて以下のように説明している。

カナケはメラネシア世界で最も力のある原型の一つだ。彼は最初に生れた人間の祖先だ。彼は（カ
ーズの…筆者注）棟木であり、中心の柱、強大な円錐形家屋の聖域である。人間存在の源にある言
葉である。（J. Tjibaou et al. 1978 : 5）

要約すればカナケは人間の祖先であり、万物の始原としてカナクのアニミズム信仰における重要な概念である。地方の創世神話であるが、ポリネシア語のカナカに類似しており、人間（祖先）を示す意味内容もほぼ一致する。こうした経緯から彼ら自身がカナクという言葉に民族アイデンティティを付加したといえる。

二、二 社会集団のステレオタイプ化と社会階層

ニューカレドニアではトントン・マルセル (Tonton Marcel) という漫画の登場人物が広く知られている。ベルナル・ベルジェ (Bernard Berger) の風刺漫画の主人公がマルセルであり、カルドーシュの典型とされる。この風刺漫画には四人の主要な登場人物がおり、ニューカレドニアの地方に在住する社会集団を代表する。デデ (Dede) はカナク男性であり、ほとんど労働せず、部族社会よりも街の店などにいる。ジョワンビユー (Joinville) はメトロポリタンの若い男性で派遣されてフランスから来た。タタン (Tathan) はヴェトナム移民の男性で「タンスストア」を経営する。マルセルはカルドーシュの壮年男性である (Christiane Terrier-Douyère 1996 : 209)。

彼らはニューカレドニア住民を構成する基本的な四つの社会集団であり、白人―アジア人―カナクという植民地民族社会の階層を表している。さらにはメトロポリタン―カルドーシュ―アジア系および他移民―カナクおよびメラネシア系の細分化された社会階級を表象している (Ibid. : 215, Max Chivot 1996 : 99)。これらの登場人物は地方の社会の特徴を表しており、牧畜業や農業、漁業を生業とするカルドーシュ、フランスから派遣された企業や官公庁に勤務するメトロポリタン、部族社会に暮らすカナク、雑貨店など商業を営むアジア系移民という職業による特徴を描いているのである。実際に本島中部から北部にかけての西海岸では大牧場や農園がカルドーシュにより営まれており、カナクは町あるいは郊外に部族集落を形成する。町には市役所、学校、教会、病院、雑貨店などがあり、メトロポリタンの勤務先となる。また、アジア系移民は農園や店を経営することが多い。この風刺漫画はこうした特徴をふまえながら、各社会集団をステレオタイプに戯画化して、登場人物の個性としている。ただしデデは純粋に部族社会に生きるカナクではなく、町で他の社会集団とも交流する現代におけるフラ

ンス社会寄りのカナクの設定にしており、話に現実味をもたせている。

社会集団がテーマとされた説話を事例にみる。マルセルとカルドーシュおよびカナクの友人五人はカルドーシュという言葉について議論し差別語であるとの結論に至る。彼らはさらにカレドニアンも「馬鹿げた言葉」であり、ゾレイユ、メトロポリタン、フランス人、カナクの呼称全てに話題が広がる。カナク男性が *canaque* についても綴りが変化しただけで問題だと述べると、他の者たちが *caldoché* を *kaldoché* に、*calédonien* を *kaldédonien* にした方がよいと言う。そしてマルセルは翌日メトロポリタンのジョワンビユーにたずねることにする場面で終わる。この説話では全ての社会集団の呼称に問題がみられるので、カナクが綴りを変化させて差別語から民族アイデンティティをもつ自称に昇華させたように、c を k に変換すれば「解決」という皮肉が込められ、さらにメトロポリタンに最終的に解決や要求を依存しなければならない滑稽さが描かれている。これらは現実の生活とはかけ離れたものでカリカチュアされた世界であるものの、実際に人々が社会集団の呼称において困惑する状況が示されている。

メトロポリタンという言葉には本国人としての誇りや自信が付随するのに対して、カルドーシュには蔑称的な意味合いが含まれる。たとえば本国出身のフランス人に「あなたはメトロポリタンですか」と質問すると、「はい、私はメトロポリタンです」と回答する。一方、ニューカレドニア生れのフランス人に「あなたはカルドーシュですか」と質問をすると困惑した表情を示す。この問いに対してある者は次のように答えた。

確かに私はニューカレドニア生れのフランス人だ。でもカルドーシュとは呼ばれたくない。それはよい意味ではない。馬鹿にした表現だと思う。この島でカルドーシュと言わない方がよい。カレ

ドニアンと呼んでほしい。

また、メトロポリタンがカルドーシュと表現する場合、田舎者あるいは植民地主義者の子孫といった意味が含まれることがある。ニューカレドニア生れのフランス人を中傷して「あいつはカルドーシュだから（愚鈍だ）」という語りも聞かれる。また、カナクに関しても記述の際は綴りに注意が必要であり、カレドニアンとは人によって社会集団の定義が異なる問題もある。

さらにニューカレドニアで民族集団を述べる時に重要なのが混血（metis）⁽⁵⁾である。先のカルドーシュやカレドニアンには混血も含まれるが、フランス人、イタリア人、カナク、ヴァヌアツ人、ポリネシア人、ヴェトナム人、インドネシア人、日本人など異民族間での婚姻も多く、混血の割合が高い。歴史上、一八六〇年代のギラン政権で勤勉なフランス人流刑囚と地元女性の婚姻が推奨された経緯がある。その後ニッケル採掘の労働力として一九〇〇年前後および一九七〇年前後にアジア、ポリネシア、メラネシア、ヨーロッパからの移民が多く入植し、混血が進んだ。このため人口の集中する都市や首都ヌーメアは多民族社会と住民に称されることが多い。従って彼らが織り成す文化もまた多様である。

三、文化変容としてのカレドニア文化

前川啓治がトレス海峡諸島を事例に文化接合、「翻訳的適応」による内外システムの関係性を明らかにした。前川によれば文化接合とは世界資本主義的システムである外部システムと地元の「伝統」社会である内部システム

の接合であり、従来の文化接合に関する研究が「（グローバル↕ローカル）↑グローバルな視点」という認識論的立場をとることを、主体としての地域住民の積極的な役割、反応が欠けていると批判し、人類学的視座である「（グローバル↕ローカル）↑ローカルな視点」を提唱した。そして現地社会の人々による外的構造の内的構造による翻訳あるいは読み替えにより従来の価値観念の持続が可能であることを述べ、こうした一連の過程を「翻訳的適応」と定義した（前川 二〇〇〇：一七―四七）。本論では前川の述べる「翻訳的適応」についてニューカレドニアの食文化、言語（借用語）、生活面の三点から事例考察する。

食文化としてニューカレドニアでは宗主国フランスの影響が当然強いが、ヴェトナム料理が一般家庭および中華レストラン、スナックで供される。とくに揚げ春巻のネム（nem）は朝市（マルシェ）の店頭に並べられ、小さな雑貨店のカウンターでもみかける。また一般家庭で作られるため、生のネムがスーパー・ストアで販売されるようにネムの食生活での浸透度は高い。クロックムッシュ（食パンにバター、ハム、チーズを載せて焼いたもの）やカフェオレ、クレープなどと同様に一般市民に親しまれている。最近ヌーメアにオープンしたスシバー（回転寿司）でも生春巻が握りやアレンジした海苔巻、ガトーショコラと一緒に並べられている。ヌーメアの中華料理店の大半にネムや生春巻、スープヴォー（牛肉入りビーフンの汁そば）などヴェトナム料理があるのは、多くのヴェトナム移民が商業に従事し食産業に携わっていることに起因する。ニューカレドニアではほとんどシノワ（中華料理）イコール・ヴェトナム料理といえる。また、ヴェトナム移民の営む朝市や雑貨店でインドのサモサがネムと共に販売されることが多い。これはインドのマラバル（malabar）地方からの移民による食文化と考えられるが、アジアのスナック菓子としてヴェトナム人が企画・販売した可能性もあり起源が明瞭でない。

また、調味料では日本の醤油もニューカレドニア各地でソーヨー（soyo）と呼ばれ親しまれている。これは日

本人ニッケル移民の影響であり、鉱山での契約終了後あるいは重労働に耐えかねて鉱山を脱走した日本人が本島の各地に住み着き、その子孫たちが伝えた。現在大手スーパーではシンガポールで製造した日本のメーカーの醤油が販売されている。日系人の家庭だけでなく、フランス人やカナクの家でもソーヨーが使われている。バゲットの普及と並行して本島中部でみられるように米が日常食という地域もある。常食としての米はアジア系移民の食文化に由来する。

さらに一八七一年のアルジェリアでの先住民蜂起により流刑されたカビール(Kabyles)人が多数定着したブーライユ(Bourail)では、アラブ料理のシシカバブが日常料理としてみられる。ムスリムであるカビール人は船での移送中の食事であった豚肉の塩漬けやコンソメ・スープを宗教上の忌避から食べられず、他の民族に比べて船中での死亡率が非常に高かった(CTRDP 1992:57)。生存したカビール人はニューカレドニアに到着後中部西海岸の町ブーライユに定住し、その子孫が混血化しつつアラブ社会を形成した。この料理はこの地方の特産物であるシカ肉と結合してシカ肉のカバブとなった。

ポリネシア系移民、とくにタヒチ人のもたらした料理も定着している。タヒチ料理のポアソン・クリュ(poisson cru)は文字通り白身の生魚にレモンをかけ、エシャロットなどの野菜を入れコナツツミルクで和えたものである。ポアソン・クリュはパレオなどのタヒチ製品と共にタヒチ移民によりもたらされたが、レストランだけでなくスーパー・ストアの惣菜として販売されており、サシミよりも生魚の食べ方として住民に普及している。

公用語はフランス語で、他にカナク言語として現在二九言語が認められている。この他に移民の間で話されるアジア系の言語やポリネシア語、メラネシア語などがある。住民がよく別れ際にいう「アレ・タタ・バイ(Allez, tata bye:じゃあ、さようなら/またね)」にはフランス語、ポリネシア語、英語の三言語が含まれる。通常

正式にはフランス語で *au revoir* であるが、フランス語でさあ、あるいはじゃあに該当する間投詞 *allez* にポリネシア語のさようならである *tata*、さらに英語の *bye bye* が融合した。とりわけ *tata* はカナク言語に由来すると人々に誤解されやすい。

ニューカレドニアのフランス語には他の海外領土と同様に現地語であるメラネシア語の単語や様々な言語が混ざりクレオール語に近いものとなっている。カナク言語は地名や姓名および慣習儀礼のダンスであるピルー・ピルー (*pilou pilou*) などにもみられるが、*weekend*, *store*, *snack*, *coka* (*coka-cola*), *chewing-gum* などの英語が借用語として使用される。これらの言葉はフランス語に置換されることなく英語のまま使用されるが、借用語の多くが第二次世界大戦時に駐留した米軍によってもたらされた。ソロモン海にまで迫った日本軍を完封するため、連合軍側であるフランス海外領土ニューカレドニアに米軍が爆撃機用の空港や道路、病院、軍需倉庫、兵舎などを作り前線基地とした。戦時中約一二〇万人の米兵がニューカレドニアを通過した (Paul-Jean Stahl 1994)。英語は現在さらに観光産業や学校教育において推進されており、一層借用語が増加すると考えられる。

生活の面では「ナカマル (*nakamals*)」がヌーメアを中心に地方の住民にも浸透している。「ナカマル」とは「カヴァ・バー (*kava bar*)」のことで、ニューカレドニアには一九八〇年代頃ヴァヌアツ移民によってもたらされた。カヴァとはコショウ科の木の根から抽出した液体であり、フィジー、ヴァヌアツ、ポンペイ (ポナペ・シヤカオと呼ぶ) など太平洋の一部の島で儀礼として使用されている飲物である。カヴァには沈静作用があり、精神的に安定しリラックスできる効果がある。製法は多様であるが、ニューカレドニアのカヴァはカヴァの木を根を鉢で碎き水を入れて絞ったもの、あるいは製造されたカヴァの粉末を水で溶いたものが使用される。大手の土産店やスーパー・ストアでもカヴァの液体や粉末が販売されている。「ナカマル」とはヴァヌアツの公用語であるビ

シユラマー混成言語で「人々の集まるところ」を意味する。ニューカレドニアでもそのまま「ナカマル」と呼ばれている。しかしヴァヌアツ研究者によれば「ナカマル」という言葉に含まれる人々が男性をさすものであるため差別用語として問題になり、現在ヴァヌアツでは「ナカマル」と呼ばず「カヴァ・バー」と呼ぶのが一般的であるという。ニューカレドニアでは「カヴァ・バー」と呼ぶ人もあるが、看板に「ナカマル」とあるように依然として「ナカマル」が使われている。おもにヴァヌアツ移民が店を経営しており、客はカナク、ポリネシア人、フランス人など多彩である。

「ナカマル」は仕事の疲れを癒す場であり、落ち着つける場所としてニューカレドニア住民に受け入れられている。通常は「ナカマル」は藪の中など目立たないところにあり、門にあたる場所に「ナカマル」と書いてあり、門かカヴァを購入するカウンターに注意事項として大声を出さないこと、アルコールや麻薬を服用しないこと、子供は遠慮することなどが記されている。夕方、オープンした「ナカマル」にて人々は半分に割ったヤシ殻に汲まれたカヴァを飲用した後、茂みで唾を吐き場合によっては水を飲む。カウンターにはレモンが置かれていることもあるが、レモンについてはヴァヌアツではみられないと先の研究者が話した。つまりレモンをコーラや酒、料理に多用するニューカレドニア独自のカヴァの飲み方といえるだろう。カヴァを飲んだ後は静かに焚き火を囲むようにしつらえられたベンチに座り休む。人により程度は異なるが、カヴァを再び飲むことを繰り返す。

「ナカマル」の意味についてフランス人に聞くと「カヴァを飲むところ」と答えた。語源は不明瞭になり、カヴァを飲む場所という意味が構築された。「ナカマル」はヌーメアに約十数か所以上あるといわれ、地方にもみられる。「ナカマル」へ行く理由を観光産業に従事するフランス人は以下のように述べた。

「ナカマル」へはよく行く。ツアーでどうしようもなく疲れた時に行く。リラックスできるから。友人たちと仕事の打ち合わせをすることもある。口論にならず話せるから。気分が落ち着いてよい。

このように「ナカマル」はヴァヌアツ文化を超えて既にニューカレドニア住民の生活に欠かせない癒しの場となっている。もともとの文脈が喪失しても新たに地域における意味付けがなされ、存続した点で「翻訳的適応」といえる。

結

以上の事例でみてきたように、前川の論じた「（外部システム⇄内部システム）⇄ローカルの視点」の図式において、相互作用の（グローバル⇄ローカル）という構造だけでなく、（周縁文化⇄ローカル）という構造がみられる。外部システムとしての出来事や文化には植民地社会に多々みられるような権力による上下関係としてのグローバル対ローカルが重要な二項対立として注目される。ここに前川のいう植民地以前の「伝統文化」が前提として存在し、外部文化を地元民が主体的に解釈し受け入れる。こうした重要な構造はニューカレドニアでみるならばフランス文化の流入であり、欧米文化あるいはキリスト教などのもたらした融合文化、観光開発などである。

しかし中心⇄周縁という図式に加えて、周縁（他国）⇄周縁（現地）といった文化変容もある。ニューカレドニアではヴェトナム料理やアラブ料理、ポリネシア語の挨拶、「ナカマル」にみられる周縁文化の接合が挙げられる。それら多くの文化は移民や一時的滞在者によりもたらされたものであり、全住民という意味でのカレドニア

ンに不可欠な文化要素となっている。やがてこうした周縁文化はローカルシステムの内部に統合され透明化されるのである。この際、先住民であるカナクによる「伝統文化」は基層部分を構成する文化ではなく、ニューカレドニア社会の多民族文化の一部として位置付けられる。そこではローカルの意味が問われることになり、単に地元の先住民だけでなく、移民や全ての地域住民を対象にしたローカルが前提となろう。

総じて現代のニューカレドニアの文化は歴史的に政治的にフランス本国の強い影響を受けて構築されたが、同時に周縁部としての移民や渡来者によりもたらされた他文化を自文化に「翻訳」し、全住民が共有するカレドニア文化に変換したといえる。しかしこれは「モザイク文化」あるいは「パッチワーク的切り貼り文化」と批判される可能性がある。つまり米国のようなメルティング・ポット（るつぽ）型の文化ではなく、あくまでも民族文化が融合せず並行して共存する社会で、真の融合文化は育たないと指摘を受けよう。この点に関しては植民地社会の根源に社会集団が営む生活および現地の流儀に従い文化変容した民族文化、前川に倣い敢えていうならば「翻訳的適応された移民文化」が存在するのであり、こうしたモザイク的な根源があるからこそ民族アイデンティティが維持され、社会組織が安定し統合された文化が共有されるといえる。カレドニア文化は節操の無い混在文化なのではなく、全ての住民が歴史的にかつ主体的に創出し維持する統合文化なのである。

注

- (1) Wallis & Futuna. ポリネシアに属する諸島でフランス海外領土。ワリス島からのニューカレドニアへの移民は一九七〇年代にニッケル・ブームの重要な労働力となった。

- (2) ニューカレドニアでは一八六三年にニッケル鉱が発見されて以来、世界有数のニッケル産出国となった。一九六九―一

九七二年には空前のニッケル・ブームで不足した採掘労働力を補うため、フランス、ほかヨーロッパ、フレンチ・ポリネシア、ヴァヌアツなどからの移民誘致が行なわれた。

- (3) ニアウリとはニューカレドニアのユーカリ科の樹木である。葉から抽出されたエッセンスは殺菌、消炎など様々な効能があり、特産物となっている。第一次世界大戦での「ニアウリ」部隊の名もこの木に因んだ。戦後、ニアウリという呼称はインドネシア移民に対してのものに変化した。

- (4) この祭典はカナクによるカナクのための芸術祭であり、他のメラネシア文化を対象としていない。また、二〇〇〇とは二〇〇〇人の演者が集うという意味で年度ではない。五万人の観客がヌーメアの会場に集まり、創世神話の語り、ダンス、歌、劇などを鑑賞した。

- (5) 混血に関する統計データはないが、センサスでは「どこの社会に属するか」という項目が自己申告—選択式で記載されており、ヨーロッパ系、メラネシア系、インドネシア、ヴァヌアツ、タヒチ、ワリス&フツナ、ヴェトナム、他アジア系、その他で分類される。

参考文献

- Angleviel, Frédéric et al. 1996réédité (1994) *Être Caldoche Aujourd'hui*. Ile de Lumière.
- Chivot, Max 1996 (1994) "Essai pseudo-scientifique sur les spécificités sociales et culturelles des Calédoniens." In *Être Caldoche Aujourd'hui*. Ile de Lumière.
- CTRDP 1992 *La Nouvelle-Céledonie—Histoire—*. Hachette
- Groupe de Recherche en Histoire Océanienne Contemporaine 1997 *101 mots pour comprendre l'histoire de la Nouvelle-Caledonie*. Ile de Lumière.
- 石川栄吉編 一九八七『オセアニア世界の伝統と変貌』山川出版社
- ITSEE 2000 *New Caledonia Facts and Figures 2000*. ITSEE
- ITSEE 1997 *Recensement de la Population de la Nouvelle-calédonie : Principaux tableaux*. ITSEE

前川啓治 二〇〇〇 『開発の人類学—文化接合から翻訳的適応へ—』新曜社

Mermoud, Jean-Claude 1996 (1994) "Quête identitaire caldoche." In *Être Caldoche Aujourd'hui*. Ile de Lumière.

Pitoiset, Anne 1999 *Nouvelle-Calédonie—Horizons Pacifiques—*. Autrement.

Stahl, Paul-Jean 1994 *1942-1945 Les Américains en Nouvelle-Calédonie*. Les Editions du Santal.

Terrier-Douyère, Christiane 1996 (1994) "Nous et los Autres." In *Être Caldoche Aujourd'hui*. Ile de Lumière.

Tjibaou, Jean-Marie et al. 1978 *Kanake—the Melanesian Way*. Les Editions du Pacifique.

Wallerstein, Immanuel (ハーマーステイン) 川北稔訳一九八一『近代世界システムⅠ・Ⅱ』岩波書店 (*The Modern World-System* [1974] Academic Press, Inc.)